
DOLLS ~ ドールズ ~

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOLORES／ドールズ／

【著者名】

そら

27008Y

【あらすじ】

久々津町に住む、至って普通の高校生 青柳俊一はいつもと変わらない日々を送っていた。

だが、ある日俊一は奇怪な声を耳にする。

助けて

この声を頼りに屋上に辿り着いた俊一が目にしたものは血まみれの

少女と武器を持って佇む男だった。

「体三 出会二

「いやっ…来ないで…」

田の前にいた見知らぬ男が武器と思われる鎌鉄球を持って迫ってきていた。

なぜ私はここにいるのか、なぜこんな事になつてこらのが分からない。

ただ意識が覚醒した時には私はここにいた。

「なんで…？」

誰に問いかけるわけでもなく疑問が咳きになつて唇から漏れる。すると、田の前の男が咳きに気付いたのか、反応する。

「なんであって、そんなこと別にお前が知る必要ないんだ…よ…」

言葉が終わると同時に男が軽々と一回はある鉄球を片手で振るひ。鎌が独特の音を響かせ、全て伸びきる頃には鉄球が私の身体まで到達していく。

それとともに私の身体は重量感と強い衝撃に襲われる。

「う…」

轟音と共に私の身体は背後の障害物にがむしゃりに叩きつけられた。ぐにゃり、と障害物が私の身体の形に合わせて曲がる音が聞こえる。

「か…はっ」

途端に息が苦しくなつてくる。さつきの攻撃で身体が相当なダメージを受けたらしい。

真っ赤な鮮血が雨のように身体から滴り落ちる。段々意識まで朦朧としてきた。

……なんで私はこんな風にあつていいの？……何も覚えていないの？

薄れゆく意識の中で誰かに届く事を信じて言葉を纺ぐ。
誰か…誰か…

「助けて…」

「はあー」

大きな溜息を対照的な小さな口から放つ。

今は世界史の授業中 老教師の歴史は開拓の上りヒアを聞き流しながら窓際の席から外を眺める。

俺、青柳俊一はここ久々津町に存在する柳林学園に通う普通の高校生。

特に秀でたものは無い。体力、頭脳共に平均レベル。顔も人並みだとは思う。彼女なんてものはいたことないけど。まあ、変わったところがあるとすれば、

くれたお金と家で生活している。

今時には珍しい家が隣同士で幼少時からの幼馴染がいること。
それと今、俺の隣りの席で教室の半数には聞こえるであろう大きな

いびきをかいてるこいつ、柿本夕と友人といふことだ。

だけど俺が変わってるわけじゃなくてこいつが変わってるだけなんだけど、まあそれは後で追々話す事にする。

なんて、余りの暇さに誰が聞くでもないが長々と血口紹介をしてみる。もちろん心の中でだ。

それでは今日はここまで

お、ちよつと授業も終わつたみたいだ。老教師が荷物をまとめて教室から出て行く。

さて俺も飯の準備…の前に隣のつるさん奴を叩き起しやしないとな。クラスにも俺にも騒音が迷惑になつて仕方がない。

「おー、ひ起きれ！」

さつもの宣言通り、振り上げた手を勢いよく脳天に叩わせて叩き落とす。

鈍い音が辺りに響き、じんわりとした痛みが俺の手に響く。少しやりすぎたかもしねー…

「まあいいか。夕だし」

「よくないよ！ 痛いよ！ しかも夕だしつて何！？」

起きぬけから元気な奴だな、寝てたと思つたら一気なり飛び起きたよ。

そしてびりやうりやうりの歎きは心の中だけに留めておいたはずなんだが声に出ていたらしい。

「気にするな、ただの本音だ」

「ヒドイー！ ヒドイよー！ せめてもう少しオブラーートに包んで！」

つるさい奴だな、我が友人ながら鬱陶しく感じてきた。

まあ今のは「冗談のつもりだったんだが、こいつは寝起きなので本気に捉えているみたいだな。

これ以上長引かせると昼飯の時間が無くなってしまつ、そろそろ終わらせるか。

「ねえ！ さつきの言葉嘘だよね！ 僕たち親友だよね！」

「つるさい、落ち着けさつきのは冗談だ。さつさと飯食うぞ」

「あ…なんだ冗談かビックリした～まあ僕と俊一の仲だもんね。

そんな事あるわけない！ 学食でパン買つてくるから待つて！」

僕以外の奴と食べるなよ～と反吐がでそうなセリフを笑顔で吐いて夕は教室から出て行く。

：一人になって初めて気づく。クラスメイト、特に女子からの変な視線が怖い。

くそ、あいつ帰つてきたら全力で無視してやる。

「さて、どうするがな？」

夕を全力無視しながら昼飯の時間を堪能し、教室から出てくる。後方の教室付近から聞き覚えのあるような謝る声が聞こえる気がする

るのは

満腹になつて眠くなつたことによる幻聴だらつ。きっとそつだ。

当てもなくふらつとかなーと残りの昼休みをどう有効活用するか考えてい

助けて

「…?」

なんだ…? 今の…脳に直接語りかけてくるような感覚。

辺りを見回してみるが、俺の近くに人はいないし、さつきまでいた気配もない。

じゃあ今のは一体誰が…? ああつ駄目だ! 頭が混乱して思考が働いてくれない。

まずは落ち着け… 考えるのはそれからにしよう。

落ち着くためには深呼吸だ。息を吸い込み小さく吐きだす。

「ふうっ、落ち着くまではいかなくとも気休め程度にはなったか?」

さて、さつきの声? について考えてみるか。

とは言つても情報なんつものはさつきの奴しかないんだけど。

この際誰が言つたかなんて関係ない。何処から聞こえてきたかが重要だ。

場所が分かれば声の主もそこそこいるはずだから。

.....

「だが、分からん」

当たり前だ。俺はどこの天才探偵でもないし、ましてや超能力者でもあるまいし。

一端の学生の俺には色々と無理がある問題だ。少し気になるが分からぬものは仕方がない。諦めて教室にでも戻つて昼寝するか。

そう思つて教室の方向へ踵を返そつとした瞬間。

「ねえねえ、さつさ屋上で何か変な音しなかつた～？」

「ん？ 何か、工事でもやつてゐんじやない？」

「そつかー、まあ別にいつか。それでね……」

ふむ、屋上か…行つてみる価値はあるな。

これで駄目なら諦めよう。これが吉と出るか凶と出るか…少し楽し

みだ。

屋上への階段を駆け上がる度に気持ちも弾む。

何かありそつた予感がする。子供の頃に戻つた氣分になる。

案外俺も子供なのかもしねない。

一休目 覚醒

目の前には鎧びついた重量感溢れる鉄の扉。
すなわち屋上と校内の境界線。その前に俺は立つている。
しかし、向こう側からは何も聞こえてこない。やっぱ間違いだった
のか。

まあ、確認だけでもしておくかな。

そう思い、ずいぶん古めかしいドアノブを捻る。
鎧びついて重くなつた扉が音と共に開いていく。

人間誰しも非日常の場面に遭遇した時には、
一瞬思考が停止して決められたテンプレート通りの言葉を出す筈だ。
「何…これ」とか「どうこう」と?なんてそんな感じの言葉を。⁹

「何だよ…」
「これ」

そういう俺もその一人。

扉を開くと、そこには…ありえない光景があった。

それは一言で表すなら「地獄絵図」

コンクリートで出来ている筈の地面は所々が重機を使ったかのよう
に砕かれ、
転落防止用のフェンスは一部だけだがその姿をあり得ない姿に変え
ている。

極めつけは辺り一面血の海。

そしてその血液の根源であろう人物が自分の身体の形通りに歪んだ
フェンスに磔状態にされていた。

しかも、その人物は身体の大きさなどから見ても明らかに少女にしか見えない。

「……っ！」

あまりの残虐さに思わず目を逸らしてしまつ。

一体この光景は何なんだよ！

なんでこんなことが普通の高校の屋上で起つてるんだ…。

「なんだよ、誰か来たのかよ？」

「！？」

いきなり屋上の奥の方から声が聞こえる。

恐る恐る扉を盾に覗いてみると。

さつきは扉が死角になつて見えなかつたがどうやら人がいるようだ。

「おーーーそこにはいんだろーー出てこよーー出て来ねーなら……殺すぞ」

ヤバい！本能がそう訴えてくる。

だが、恐怖で身体がすくんで動かない。でも出て行かないと…。

「…………」

無言で身体を露見させる。心臓の鼓動が尋常じやない早さで刻まれていく。

そこにいたのは、銀髪で長身の少し痩せ形で、年齢も俺と大して変わらないぐらいに見える男がいた。

ただ一つ、決定的に違つていたのは自分の身長の半分はあろうかという1m程の鎖が付いた巨大な鉄球を手に持つていた事だ。

しかも服が返り血を浴びてている。恐らく…いや確實にこの男が少女

をやつたに違いない。

「お前が…やつたのか？」

少女の方を向いて男に問いかけてみる。

「ああ。それがどうかしたのかよ？お前もあんな風になりたいのか？」

そう言つて鉄球をまるで風船を持ち上げるかのように軽々と左手で持ち上げる。

一体どうこつ原理だつたらあんな事が可能になるんだよ…。

「どうして、あんな小さな女の子をあそこまでする必要があつたんだ？」

「んだよお前…んな」とはお前には関係ない」とだ。あまり詮索が過ぎると…死ぬぞ」

狂気に満ちた眼でじつちを睨んでくる。どうやら冗談ではなくやつだ…。

だけど…

「確かに関係はないかもしねないが、この状況を見過」せぬほど出来た人間じゃないんでね」

「いいのかお前？やつきの言葉俺への挑戦と受け取るだ？」

口調はやつてしまふと変わりないが、明らかに自分の身体が震えているのが分かる。

今なら、泣いて土下座でもして許しを請えれば、助かるかもしない。

でも、例え死ぬとしても、意味がなかつたとしても、『あの少女を助けたい』、そう思つたんだ。

それに、これはあくまで俺の推測…といつかほとんど想像に近いんだけど、さつき校内で聞いた声。

あれはこの娘が言つた言葉じゃないかと思っている。

だったら期待には添えないかもしれないけど、俺は目の前の男に立ち向かつてみようと思つた。

だから…持てる限りの勇気を持つて

「好きにしり」

自分で決戦の火蓋を切り落とす。

「いい返事だ。覚悟…しどけよ」

割れる地面。舞い散る砂埃。飛び交う鉄球。

そんな状況の中、なんとか俺は生きていた。

いや、実際には生かされていると言つた方が正しいかもしれない。明らかにあの男は攻撃をわざと外してきてる。自分が楽しむ為に。

「おいおいーさつきまでの威勢はどーこつたんだよ?」

逃げてるだけじゃ俺は殺せないぜ、さつきと反撃してみな!」

地面が揺れると同時に俺の身体スレスレに鉄球が叩きつけられる。

「うわー！」

「こいつはさつきからいづやつて紙一重の所で攻撃を外していく。

ただ、無傷で済んでいるかといえばそんな事はない。

「はあはあ…はあ」

地を碎く程の威力だから当然碎けた破片が飛ぶ。

それが身体に突き刺さり、じわじわと痛みが体中に広がる。

それとともに体力もどんどん削られる。

精神的疲労も大きいな。いつ攻撃が当たるか分からない中ただ逃げ惑う。

今の俺の状態は言つなれば満身創痍。

正直、力量がありすぎた。一度も攻撃にまわることができない。しかもあいつあんな鉄球振りまわして、息一つ切らしてねえ。

ホントに同じ人間なのかよ？

それにもう一つ疑問が

「なんで…こんなことになつてるのに俺以外に誰もここに来ないんだよ…」

そうなぜかいやら地面が砕けようと轟音がしようと全く人が来る気配がしない。

「それはな、俺らの能力みたいなもんだ。聞きたいことはそれだけか？」

「だつたら……そろそろ飽きてきたな。…おい、今から殺すわ」

淡々と殺人予告をした男が鉄球に触れる。

すると、鉄球がみるみる間に膨らんでいく。

おいおい、冗談だろ…なんだあのバカでかい鉄球は。

3m超に膨れ上がった鉄球を引きずりながらこつちへと走つてくる。

鉄球が引きずられる度に地面が抉り取られていく。
今までのは完全にお遊びだつたつてことか…

あーなんかかつこ悪いな俺。

最初だけカツコつけてあの娘守る、みたいなこと言つてさ。
いざ戦いになるとただただビビつて逃げるだけ。

だつたら最初からそんなこと言つくなつて言いたいよな、數十分前の
俺に。

あいつ倒せなくともせめて、あの娘だけは助けたかつたな。

隣のフェンスで未だに意識を失くしている少女に向かつて謝る。
「ごめんな、偉そうに助けるとか言つて。ホントは助けたかつたん
だけど。

俺の完全な力不足で……だから罪滅ぼしつて訳じやないけどさ…
君を一人では逝かせない。俺も一緒に…」

謝罪の途中から涙で視界が滲む。死ぬことに対するこゝよりは少
女を守れなかつた事に対してだ。

俺に力があれば…この娘を助けることが出来たかもしれない。

でもそんな漫画みたいなことはそうそつ無い。

だから、もう一度。今度は少女の頬を両手で包みこみ、面と向かつて

「「めんな…」

涙で歪んだ顔で謝罪する。

「おい、もうお涙頂戴の展開は終わりか?待つてやつた俺に感謝し
ろよ」

男が腕を思い切り振りかぶると腕に巻きつけられた鎖が伸びる。

「だが、俺はここで見逃す程甘くはない。仲良くそのガキと死にな！」

そのまま腕を振り下ろすと鉄球が宙を舞つて俺たちの頭上に降つてくる。

ああ、ここで終わりか…。

ドクンッ…ドクンッ！

！！

なんだ！？変な感覚が身体を支配していく。

身体が熱い。だが、不思議と感覚が研ぎ澄まされる。

周りの風景が止まつたように見える。まるで世界が停止したかのようだ。

「これもあいつの能力なのか？」

そう思つて男の方を見てみるも男も停止している。じゃあ一体だれが？

いや、今は考えるのはやめよう。

それよりさつきから頭に変な知識が流れ込んでくる。

戦いの知識、何かの能力についての知識。

これは…俺の能力…なのか？

流れ込んでくる知識を元に推測する。

仮にこの能力が俺の物だとしたら、もしかしたら…少女を助けられるかもしれない！

流れてきた知識によるところの今の停止状態。これもどうやら俺の能

力の一つらしい。

これは時間の流れを極端に遅くしているらしい。

よつするに停止といつよつは超スローモーションの状態といつことだ。

ただし、このスローモーション状態、一分しか持たないみたいだ。

既にこの状態になつて30秒は経つている。

だつたら残りの時間でまずはこの娘を安全な場所に。フェンスから少女を助け出し優しく抱き抱える。

もう一度だけ最後の謝罪をする。

「助けるのが遅くなつてゴメンな。でも今度は絶対に助ける。約束する」

そつ言つて足で地面を蹴る。すると身体が風のよつに軽く風のよつに速く移動する。

これが俺の能力の、身体能力と感覚の一時飛躍的上昇だ。

少女を屋上の離れた隅の方に寝かせる。

「すぐ終わらせてくるから、待つてろ」

そつ言い残し、地面を蹴つてさながら瞬間移動のよつに男の元へ向かう。

轟音が響く。時間が来てスローモーションが切れたようだ。男は今となつては到底的外れの場所に鉄球を叩きつける。

「ふんつ、俺に刃向かうから」ついう事になるんだよ

満足げに眩く男の背中に向かつて言つてやる。

「それは誰に向かって言つてゐるんだ？」

男がビクッと一瞬身体を震わせこちらを向く。

「なつ…へじうことだ！？お前は確かにあのガキと一緒に殺しあはず…」

「ああ、俺もそのつもりだつたんだが何故かこつして生きている。もちろんあの娘もだ」

「…………なるほどな、そういうことか。」「何がだ？」

男は一人納得したように呟く。

「お前には関係ねえよ。ただし、こなつた以上お前も完全に生かしておけなくなつた」

「どうこつことだ？…………ひー。」

急に身体が物凄い衝撃に襲われる。
鉄球が身体全体を覆うようにのしかかる。

「つああああ…！」

そのまま思い切り屋上の向こう端まで吹き飛ばされ、壁に身体が叩きつけられた。

「ぐあつ…はあはあ、今のは一体…」

痛みが残る身体を引きずつて立ち上がる。

能力のおかげでなんとか生きてはいるが無かつたら確実に死んでいた。
しかも能力があつたとはいえ無防備だったところを突かれた。
それだけ今回は本気ということか。

「考え方なんてしてるとあつといつ間に死ぬぞ」

「...」

耳元で奴の声が響く。反射的に足を前に蹴りだす。
鉄球は俺の身体がさつきまであつた所をすりぬけフェンスに直撃した。

「グシャ！」フェンスが歪むどころか突き破られている。
奴の身体能力もさつきより格段に向かっている！？

確実に力は増し、移動力も俺と同じくらいになつていて。
けど、俺もいつまでもやられてるわけにはいかない。
まずはあえて奴との距離を縮める。鎖しかない部分に潜り込めば、
一発お見舞いしてやれる。

この勝負、お互に一発で決まるに違いない。
俺はさつきの一撃がかなり負担になつてる。
それに奴も本気を出してからか田で見えるほどに疲れてきている。
先に当たた方の勝ちだ。

「ふうー」

息を吐いて落ち着く。

奴もそれが分かつてているのか動きを止めて息を整えている。
お互に体制が整つたのか相手を睨みつける。
ここからはスピード勝負。どちらがより速く攻撃に転じるか。

.....

額に汗が滲む。どれくらい経つただろう。

まだ1分ぐらいしか経っていないだろうにもう数分たつたように感じる。

刹那

視界から奴の姿が消えた。

「しまったー出遅れた！」

急いで地を蹴る。身体が前に思い切り進む。しかし、既に目の前には黒い鉄の塊が押し寄せていた。

「これで、終わりだな！死ね！」

また守れないのか？ いや今度は絶対に守るって約束した。

「俺は…負けられない」

右足を軸に横へ方向転換して左足を思い切り蹴りだす。鉄球はそのまま空を切り鎖は虚空へと伸び続ける。

「なんだとー？あの距離でこの攻撃を避けただとー？」

さらに方向転換。今度は奴に向かって。地面を蹴る。何度も何度も。速く、もつと速く。身体を捻り、拳を後ろに引き戻す。

「これで決まりだ！」

走り続けたままスピードを落とさずに拳を振る。拳が何かにぶつかる感触。そのまま腕を一杯伸ばす。

風を切る音とともに奴の身体は皮肉にも自分が少女を叩きつけたフ

エンスへと叩きつけられる。

「ぐつ…くそがあ…やるじゃねえかよ…はあはあ
「はあ…はあ」

返事をしようにも疲れきつて言葉が出せない。
お互に、そのままの状態で息を整える。
しばらくして、落ち着いたのか男が

「おー、お前。名前教える」

と礼儀も何も関係無しに名前を聞いてくる。

「…青柳俊一だ。お前は？」

「銀だ。今回は俺の負けだが、次はこいつはいかねえ」

そう言つと銀と名乗つた男はそのまま自分でフェンスから抜け出し屋上から飛び降りた。

普通なら驚くところだらうけどさつきあんな死闘をした後だ。あいつがあれぐらいで死ぬはずない。

「はあーやつと終わつた。身体中が痛え」

力を使い果たし今は只の高校生に戻つた俺は、ふと少女のことを思い出す。

「あ、そういうえばあの娘大丈夫か！？病院とか連れて行かないとい…」
「あ、あのー…」
「つてよく考えたら俺も怪我してるしーつて…ん？」
「あ、あの一大丈夫ですか？」

声のする方へ振り返ると…あの少女がいた。しかも無傷で。

改めて見てみるととても整った顔立ちをしている。
子供らしく一つに結った髪、雪のよう^{ヒカル}に綺麗な肌、もじもじと微笑んでいる指も細くしなやかだ。
つてそんなことよつ！

「なんで君、無傷なの…？さつきまで瀕死の重傷だったはず…！」

「あ、はい。そうだったんですけど、私回復の能力があるんです。
だから意識を取り戻してからはずっと治癒してました」

ほり。と黙つて俺の傷口に手をかざす。するとみると内に傷がふさがつていぐ。

「おおっ…すげえつて、そういうえば何で君こんな所にいたの…？」

兼ねてからの疑問を少女に対しふつけてみる。

「それが…私記憶が全くないんです。今までの。残っている記憶は能力の使い方だけで…」

返つて来た返答は予想を遥かに超えていた。

「え…？ 何も…全く…」
「はい、名前すい…」

それはまた難儀な…。ヒヒヒで重要な事に気がつく。

「あれ？ つて…」とほもしかして帰る家も…」

「はい…」

今にも泣きそうな声で返答する少女。「これは大変だな…
あいつに頼んでみるか?
いやでもこの娘連れてつたら、見た目まだ中学生だから確實に変な
眼で見られるよな…」

「うーん」

必死にこの娘をどうするか考える。

夕の所は?…いや駄目だあいつにだけは任せられない。
ちらつと少女の方へ目を追いやると涙目でじつちを見つめていた。
くつーあんな目で見られたら……仕方がない。最終手段を使うか。

「なあ

「は、はい?なんでしょうか?」

「もし、もしもよかつたらだ。俺の家に来ないか?」

「ふえつ?」

「俺さ一人暮らしだから他に誰もいないし、俺も全然構わないから
れ」

「ホント?…ホント?…いいんですか?」

「ああ、構わない」

「ふええつ!…!ありがとう!それこまかー!…!」

遂に涙が溢れてしまつた少女はそのまま俺の所へと飛びついてきた。

「のわあつ!…」

やれやれ、これから騒がしくなりそうだ…
そう言いつつも俺の顔は綻んでいた。

三体目　一夜明けて

「んっ……」

部屋の窓から差し込む日差しを身体に受け目覚める。目覚めるまではよかつた。

突如、体中に針が刺さるような鋭い痛みを感じる。

「う……」

叫びたくなる気持ちを必死で抑え……ようとしたが。

「いっ、痛つてええーーーー！」

結局、痛みを堪え切れずに朝っぱらから近所迷惑な叫び声を上げることになった。

「ど、どひしましたーーーー！　俊一さんーーーー！」

俺の叫び声を聞いたのか件の少女が、こっちがどひしたと聞きたくなるほどの騒音をあげながら、部屋へと走ってくる。

「お、落ち着け！　俺はとりあえず大丈夫だー！」

このままだと向こうの方が酷い事になりそうな危機感を感じ、急いで自分の無事を知らせる。

「へ？　大丈夫なんですか？　……はあーびっくりしました。」

俊一さんの身に何があったのかと思つて私…

「さつきも言つたが大丈夫だ。心配するほどの事じゃない。……ほ、本當だ！ とりあえず涙目やめろ！」

涙目の少女を全力で宥める。女子の涙はいつみても苦手だ……。
……でも、こいつも俺の事を本気で心配してくれている。それは今
のこいつの姿を見れば一目瞭然だ。

今さつき起きたと言わんばかりの爆発した髪型、なぜか身体に擦り
傷が出来ていて。多分さつきの騒音はこのせいだろう。
まあそれも急いでくれた証拠だ。息も切れ切れだし。原因があ
まり大した事ないだけに少し悪い事をした気分になる。
……なるんだが。

「なあ……一つ聞いてもいいか？」

頭を抱えたくなる気持ちを必死に堪え、ぴくぴく動くこめかみに手
を当て問い合わせる。

「ふえつ！？ なんですか？」

一方原因の方はなぜ、質問などされるのかといった感じでこっちを
まじまじと見つめてくる。

正直、今その行為はとてもなくやめてもらいたいんだが……

「お前はその……世間一般で言つ裸族……という奴なのか？」

直接的な表現を避け、間接的に自分に出来る最高の伝え方をする。
が、しかし

「……？ ら……やべ……ってなんですか？ 何かの能力ですか？」

ああーそっか……！ じつ今記憶飛んでるから何も覚えてないんだっけか。

でも普通の記憶喪失は、記憶だけ飛んで知識は残ってるはずなんだけど。

まあさすがに最低限の知識はあるみたいだ。

でも戦いの能力に関する事ばかり覚えてるつてのも変な話だよな実際。

まあまあ、能力って言葉が当たり前になりそうな俺が一番変だけどな！

このままいぐと疑問が尽きなさそうだったため無理やり考えを終わらせて、少女の質問の答えを教えてやる。

「えー、まああれだな。答え聞く前に一回鏡かどっかで自分の身体見てこい。

それでも分かんなかつたら教えてやる」

「？ はあ…分かりました…。いってきます」

あまり納得しない様子でとぼとぼと部屋を出て行く。

まあ、さすがにあれで氣づくだろう。でかそっちの方がいい。

俺の口から答えを聞かせるよりよっぽどマシだ。

さて、これからあいつに世間の常識というものをきちんと教えてやらないとな。

はあ…少しだけ子を持つ親の心が分かった気がする。と、いつちょ前に悟ったような事を言ってみる。

本日2度目の近所迷惑が起じるのはそれからすぐだった。

少女と共に朝食をとる。聞きたい」とは色々あるがとりあえず今は無理そうだ。

「…………うう、恥ずかしすぎて死にたいです」

顔をトマトの様に真っ赤に赤面させ、涙目で俯く少女。原因は言わずもがなさつきのあれだ。

ちなみに今は俺のTシャツを着せている。大きすぎてかなりアカブ
力だ。

「昨日来てた服はどうしたんだ？」

あえて、直接連想せざるべくな」とはなつて、言葉を選んで会話をす
る。

「あれは……もうボロボロだったし、血で汚れてたので……」「そっか……」

少女はさつきとは表情を一変させ少し、暗く陰った表情になる。
そう、思い起しそばつ、昨日俺は銀と乗る男と命を賭けた戦いを
繰り広げた。

そこで少女はその鎧に殺される寸前だった。思はず思い出したくなかった。
嫌な記憶を蘇らせてしまったかもしれない。

「うめんな…もう忘れないよな」

「い、いえいえ！ 俊一さんが助けてくれたので全然気にしてませ

ん！」

あんなことがあつたのにもう笑顔で笑い飛ばせるほどになつてゐる。
強い娘だ。…例えそれが彼女の空元氣だつたとしても。

なんとかしてやりたいな…この娘にはもっと笑顔でいてほしい。
笑顔がよく似合う女の子だ。これから的人生は幸せにしてあげたい。
なにか俺に出来る事は…

そうだ！

「おい！」

「え？ なんですか？」

朝食のベーコンエッグを何故かナイフとフォークで綺麗に切り分けてとても美味しそうに食べている少女。
なんだその食べ方は、てか何でナイフとフォークの使い方は知つてるんだ…
…それよりナイフとフォークどつから持つてきた。俺ですらある場所知らんのに。

まあ、今はその事は置いておこう。そんな事よりもっと大事な事がある。

「お前の名前を決めないか？」

「名前…ですか？」

「ああ、そうだ。無いと色々と不便だろ。俺も呼び方に困るし
「はい…それは確かにそうですね」

「問題無いか？ 名前は俺とお前で考えるんだけど

「ふふっ！ はいっ！ 大丈夫です！」

「どうした？ そんなに嬉しいのか？」

「いえ……何か俊一さん、お父さんみたいだなつて
「なつ！……んんつ、それじゃ名前決めるぞ」
「はい…」

さつきの笑顔は反則だ。ますますこの娘を喜ばせたくなつた。
やつぱり世のお父さんはこんな気持ちなのか？
だとしたら父親も悪くないな。

「それで名前だがどんなのがいい？」

自分の名前を自分で考えさせると、この前代未聞のやり方で決めにかかる。

実際は中々いい案が浮かばず俺がこの娘に丸投げしたというのが正しい。

さすがに少女むこの無茶ぶりには顔をしかめ、

「うーん、私は自分で決められないです。やつぱり名前は他の誰かに付けてもらいたいです。

だから、俊一さん。私の勝手なわがままで申し訳ないんですけど、名前決めてくれませんか？」

そこ今まで、そこまで真剣にお願いされたら断るわけにはいかないな。

「よし、わかつた。実は最初からお前見ててこれいいなつて思つた
名前あるんだよ」

「えつ！ 何ですか！？ すごく聞きたいです！」

そこまで食いつかれるとは思わなかつた…
もう少し気楽に聞いてほしいんだけどな。

「あんまり期待すんなよ。嫌だつたら嫌つて言つていいからな」「わかりました」

「お前さ、小さくて可愛い感じが鈴に似てるから」「鈴」つてどうだ？ あんま自信ないんだけど」

「鈴……鈴、鈴、私は鈴。……いいですね！私気に入りました！」
「そ、そつか、ならよかつた。……つてことでこれからよろしくな

鈴」

「はい！ こちらこそ直しくお願ひします！ 俊一さん」

「ふう、名前も無事に決まってよかつた。

鈴も喜んでるみたいだしひとまずは成功か。

これで一つ目の計画が完了。さて次の計画に移るか。

**

朝食も食べ終わり部屋でくつろぐ。

「いえいえ！ じつして普通の生活を出来ていいのは俊一さんのおかげですから

それに名前までもうつて…恩返しの意味も込めてこれぐらいはせやらせてください…」

つて真剣に言つてくるもんだから、とりあえず食器の後片付けのやり方を教えて任せってきた。

少し心配だが今のところ食器の割れる音は聞こえてないので大丈夫だろ？。

「鈴か…」

突然の出会いを経て、今では家族の一員となつた少女の名前をぼそりと呟く。

昨日あの後、俺は鈴と共に文字通り逃げるよつに屋上を出た。途中で、教室によつて鈴を俺の体操服に着替えさせる。さすがにあの血まみれの服じや補導されかねなかつたからな。学校を出て街中に出るとあんなことがあつたのに誰もそんなことには気づかずに普通の日常を送つていた。

あれも銀が言つてた「俺達の能力」つて奴のせいだつたんだろう。

銀…と名乗る男。あいつとはまた会いそうな気がする。

それに仲間もいるみたいだしな。ただ、あいつの目的が分からぬ。鈴が狙いなのは昨日の事で分かつてゐるが、何故鈴を狙うのか、そこが分からぬ。

まあ、今は聞く相手もいなことだし、このことばこここまでこじとくか。

（

「ん？」

携帯が無機質な音楽を流しメールの受信を知らせる。
夕か？こんな朝つぱらから迷惑な奴だ。まったく…
そんなことを思い、携帯を開き新着受信メールの所を確認する。
しかし、送信者はある意味、夕より面倒な相手だった。

「今からそつち行くから

必要最低限の言葉だけ伝えるメール。
隣りに住む幼馴染、五十嵐咲からだ。
いがらしきさき

どうやら今から来るらしい。何かの用事か？
まあ、とりあえず最低限の準備だけしつくか…

「俊一ちゃん、後片付け終わりましたー」

「あ、鈴がいるの忘れてた。どうする？ 鈴を見られるわけにはいかない。」

けど、咲の奴が来るまでもう本当に時間がない！

「俊一さん？ どうかしたんですか？」

「鈴…えーとだな…」「俊一ー？ 来たわよー」「

「来た、やっぱい！ 鈴とりあえずここ隠れる！」

「ふえ？…きやつー俊一さん！？ 何するんですか！？」「…

「すまん、しづらへそ」で居てくれ。俺が来るまでそこから出るな

よ？」「

「えつ？…ちよつと俊一ちゃん…」

後ろから鈴の声が聞こえるが部屋を出る。鈴すまん。
すぐ終わらせるから待つてくれ。

そう心の中で懺悔して俺は玄関へと向かった。

サラリとした長い黒髪に、人形のような顔立ち。
服から溢れんばかりの胸、高身長のスカートから覗くすりつと伸びた長い脚。

これだけなら誰もが振り返る美少女だろう。ただし……

「あんた、女の子連れ込んでるでしょ」

扉を開くなり、開口一番でこんな事を言つてへるおまけにまだナビな。

「咲、お前…いきなりなんだよ…？ てか、なんでそつなるんだよ？」

一瞬、ギクシヒはしたものの、ここで動搖したら確実に座しまれると思い少し強く反論する。

「ふんつ、その反応がすでに駄目ね。普通ならもつと冷静に対応するはずよ。

……身に覚えがないならね

「いや、この場合の普通の対応ってなんだよ… むしろいつの対

応の方が普通だろ」

「なんでそう思うの？」

「誰でもこきなり女連れ込んだとか聞かれたらいつなるだりつむ

「じやあ、絶対なつて断言できるへ。もし嘘だつたり匕つするの

？」

「ああ。嘘だつたらお前の事何でも聞いてやる

ふーん。と全く関心のない返事をする咲。

こいつ、絶対俺の話を聞いてねえな…… もう俺の事は無視して家の中観察してゐるし。

すると、じまへるが関から家の様子を観察していた咲が急に

「俊一がそこまで言つたな？ 信じてあげる。……だから最後に一つ聞いていい？」

「なんだよ？」

「さつきから、といつまに私が来た時からずっとここ見てゐるあの

娘は誰?」「

「……え?」

言われて恐る恐る後ろを振り返つてみると

「あつ……」

「鈴……お前」

堂々と、もう隠れるどころか完全に身体が見えていた。
何やつてんだよ……思つたりバレてんじゃねえか。
しかも、隠れてうつて言つたのに最初から見てたのかよ……

「あひ、もちろん説明してくれるんでしょうな?」

「い、いや……はは

「し・て・く・れ・る・ん・で・し・ょ・う・ね・?」

「……はい」

はあ、まさか咲にバレるとは。

これは夕にバレるのも時間の問題だな……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7008y/>

DOLLS～ドールズ～

2011年11月27日20時48分発行